

保育者に求められる音楽的専門力量形成について（Ⅰ）

～T短大卒業生へのアンケート調査を通して～

○三宅啓子 福西朋子 山本敦子

（高田短期大学）

Ⅰ. 研究目的

養成校の教育は、保育現場に求められる保育ニーズ、学生の意識の変化、ましてや養成課程のカリキュラムのスリム化等により、近年この教育実情は非常に多様化している。特に子どもの音楽活動を支える音楽技術技能向上の養成が多難になってきている。このような状況の中、保育者に必要と求められる音楽的専門力量はどのようなことなのかを的確に把握し、養成校での音楽教育カリキュラムの再検討とその指導法の工夫をはかりたい。そこで、2年間の限られた養成期間で現場に即した音楽教育カリキュラムを実践するために、まず保育現場での実情を知ることが必要だと考え、「音楽活動に関するアンケート」をT短大卒業生対象に実施した。

本研究は、この調査結果から保育者の音楽技術技能は、現場で行う音楽活動にどのような影響を及ぼしているのかということを考察し、今後の養成校での音楽教育の課題検討をするものである。

Ⅱ. 方法

1. 対象 平成3年度～平成13年度T短大卒業生 200名
2. 調査時期 平成15年7月～8月
3. 調査方法 質問紙郵送によるアンケート調査
4. 回収 有効回答数 46名（回収率23%）

Ⅲ. 結果と考察

1. 保育現場での音楽活動の様子

表1は、保育現場で行っている音楽活動を集計結果からよく行われている順にランク付けしたものである。

表1より、「手・指あそび」がよく行われていることがわかる。子どもの興味をひかせ保育準備に時間を要さない教材として重宝していることが伺える。ついで「歌唱」「歌あそび」とあげられた。歌唱を伴った活動が保育現場では多い。活動時間は「登園・降園時」や「次の活動への移行時」であった。また、これらの他に上位にランクされた「B.G.M.として音楽を流す」の活動時間は「生活面の活動を行う際」であった。このような結果は、これらの活動が保育時間に日常的に組み込まれ、あるいは以前から恒常的に行われてきたと推測できる。それゆえ、よく行われる活動として上位にランクされたと思われる。その他、この活動時間項目から考えられ

ることとしては、第1に、下位にランクされたオペレッタ、器楽合奏、マーチングというのは、園が設定する行事の成果を目指して行う音楽活動として捉えているということ、第2に、それ以外の音楽活動の多くは保育者自身の音楽技術技能やセンスを活かして意図的に行う音楽活動と捉えているということである。

表1 保育現場で行なっている音楽活動とその活動時間

音楽活動		活動時間	
1. 手・指あそび	43 (93.5)	次の活動への移行時	17 (39.5)
2. 歌唱	33 (71.7)	登園・降園時	18 (54.5)
3. 歌あそび	27 (58.7)	クラス全体で行なう活動時	7 (25.9)
4. リズムあそび	19 (41.3)	クラス全体で行なう活動時	14 (73.7)
B.G.M.として	19 (41.3)	食事時間など生活面の活動時	7 (36.8)
5. リズム身体表現	18 (39.1)	クラス全体で行なう活動時	9 (50.0)
6. 楽器演奏（鍵盤楽器）	10 (21.7)	クラス全体で行なう活動時	3 (30.0)
		行事の練習	3 (30.0)
楽器あそび	10 (21.7)	クラス全体で行なう活動時	5 (50.0)
7. 楽器演奏（その他）	9 (19.6)	行事の練習	5 (55.6)
リトミック	9 (19.6)	クラス全体で行なう活動時	7 (77.8)
8. オペレッタ	7 (15.2)	行事の練習	4 (57.1)
9. 器楽合奏（簡易楽器による）	6 (13.0)	クラス全体で行なう活動時	2 (33.3)
		行事の練習	2 (33.3)
10. マーチング	5 (10.9)	行事の練習	3 (60.0)
11. 音あそび	4 (8.7)	クラス全体で行なう活動時	1 (25.0)
		自ら選んで行なう活動時	1 (25.0)
		行事の練習	1 (25.0)
音楽鑑賞	4 (8.7)	自ら選んで行なう活動時	1 (25.0)
保育者による演奏	4 (8.7)	登園・降園時	1 (25.0)
12. 保育教材を伴った音楽あそび	3 (6.5)	自ら選んで行なう活動時	1 (33.3)
		次の活動への移行時	1 (33.3)

2. 保育者自身の音楽技術技能に対する自己意識

保育者の「得意な音楽活動とその理由」「不得意な音楽活動とその理由」についてあげ、この意識が、子どもの音楽活動にどのような影響を与えているのかについて考察する。

表2の「得意な音楽活動」は表1の上位の結果とほぼ同じ順で表れた。得意な理由は、その活動を行うにあたって必要な技能が身につけている、その技能に自信があるということが大半であった。前述ではこれらの活動は、「日常的によく行う活動であるから上位に表れた」と考察したが、保育者自身得意な活動であるから「よく行われる」ということもしえる。それに対し「不得意な音楽活動」では、その技能が苦手である、身につけていないということであった。「その活動に対しての経験が少ない」という理由も必要な技能を身につけていないととることができよう。また、保育者が自己の保育観や音楽技能から「オペレッタやマーチングは行えない」と例え思っている、園の保育方針として位置付けられている音楽活動であれば、十分な技能や知識のないまま、不得意意識を持ちながら、活動を行っている、という現状が伺える。これらのことは、白石ら（2001）の「音楽に関する活動は、

とりわけ保育者の音楽的力量的差で幼児の音楽的活動の質・量が左右される」注1)ということに一致する結果となった。そして、とりわけ「その質」に対してアンケート結果から勘案してみると、保育者が得意でよく行われる活動が子どもに望ましい活動というわけではない。保育者の音楽観のもとで音楽的成長が意図された活動でなければならないということがいえるのではないだろうか。

その他に「不得意な音楽活動」としてオペレッタ、マーチング、リトミックが「経験が少ないため」という理由で上位にあげられた。この結果は、養成校(T短大)での、この活動に対する経験や意識不足からのものであり、さらに今後の授業内容の充実を期待しているものだと読み取れる。

表2 得意な音楽活動とその理由

音楽活動	理由
1. 手・指あそび 14 (30.4)	興味・関心がある 7 教材のレパートリーがある 2 歌うことが得意・好きである 1 経験を重ねたため 1
2. 歌唱 11 (24.0)	歌うことが得意・好きである 7 子どもに合わせてピアノが弾ける 3 初見ができる(読譜力がある) 1
3. リズム身体表現 7 (15.2)	音楽に合わせて体を動かすことが得意 7 子どもに合わせてピアノが弾ける 1 指導・援助力がある 1
4. 歌あそび 5 (10.9)	興味・関心がある 1 歌うことが得意・好きである 2 音楽に合わせて体を動かすことが得意 2
5. 楽器演奏(鍵盤楽器) 3 (6.5)	興味・関心がある 1 子どもに合わせてピアノが弾ける 3 楽器演奏が得意である 1

表3 不得意な音楽活動とその理由

音楽活動	理由
1. オペレッタ 8 (17.4)	経験が少ない 3 指導・援助力が乏しい 2 興味・関心がない 2
2. マーチング 7 (15.2)	経験が少ない 5 指導・援助力が乏しい 1 興味・関心がない 1
3. リトミック 6 (13.0)	経験が少ない 5 指導・援助力が乏しい 1
4. 楽器演奏(鍵盤楽器) 5 (10.9)	初見ができない(読譜力に乏しい) 3 楽器演奏が苦手である 1 経験が少ない 1
保育者による演奏 5 (10.9)	楽器演奏が苦手である 3 初見ができない(読譜力に乏しい) 1
5. 歌唱 4 (8.7)	歌うことが苦手である 1 楽器演奏が苦手である 1 初見ができない(読譜力に乏しい) 1

次に現場で活動を行っていく上でもっと身につけたい技能についての結果を経験年数別にあげる。

表4 もっと身につけたい音楽技能

経験年数	音楽技能
1～2 (7名)	読譜力 3 (42.9) ピアノ弾き歌い力 3 (42.9) 音楽を伴う保育教材の演じ方 3 (42.9)
3～4 (18名)	ピアノ奏法 8 (44.4) ピアノ弾き歌い力 8 (44.4)
5～6 (13名)	鍵盤楽器以外のメロディ楽器奏法 6 (46.2)
7～10 (8名)	読譜力 4 (50.0) 音楽による感情表現 4 (50.0)

経験年数5年を境に求める技能が大きく変化してきている。経験年数5年までは、主にピアノ技能の向上を求める結果であった。経験の浅い保育者は、1) 自身のピアノ技能が保育

実践の場ではまだまだ不足であるということ、2) この技能が日々の保育、音楽活動において有効に必要な保育技術であると認識している、ということが伺える。これに対し、経験年数5年以上になると、メロディ楽器の奏法や音楽による感情表現方法を身につけたいという想いが上位にあらわれる。このことは、①自身の技能の幅を広げ子どもの音楽活動に新たな展開を望んだり、②音符を再現することだけにとどまらず子どもたちには音楽によって豊かな心を育てほしい、といった意識からではないだろうか。保育者自身がそれぞれの音楽観のもとに音楽活動を展開していきたいという姿勢が伺える。

IV. まとめと今後の課題

1. まとめ

(1) 保育現場では恒常的、日常的に行われる音楽活動や予め設定された活動が多くを占める

(2) 保育者の音楽技術技能の程度や自己意識が音楽活動の量や質に影響を与える

(3) 保育者は保育現場で経験を積み重ねることによって、音楽活動に広がりをも求めていくという姿勢を持つ

2. 今後の課題

保育者に必要な音楽的専門力量とはどのようなことを指すのであろうか。それは、現場で即、実践できる技術技能がまず身につけているということ。そして、それは現場での経験の積み重ねにより磨かれ、さらに望ましい活動を行うための保育技術技能へと変化していくものである、ということである。では、養成校が音楽的専門力量形成の為にどのような役割を担うべきなのだろうか。本研究結果として次のような授業工夫改善が必要であることが明らかになった。それは

(1) 現場での経験がよりよき積み重ねとなるよう、さまざまな音楽技能に関して不得意意識を持たせない (2) 技術不足であっても活動に取り組んでいこうとする意欲を芽生えさせるようにする (3) 学生自身の音楽観の広がりをも求めて豊富な音楽経験を重ねていけるような土台づくりをする、ということである。

保育者が子どもの音楽活動をよりよく支えられるようになるために、養成校側は、学生に基礎的音楽技能を充分習得させることはもちろんであるが、学生自らが意欲的に、肯定的な意識でもって、どのような音楽技術技能をも獲得しよう、とする姿勢を育てることが、まずもって必要なことといえる。

学生の意識、音楽経験の差が顕著な昨今、特に検討必要な課題として取り組みたい。

注1) 白石 三国 山中 「保育過程における音楽的活動(2)」

日本保育学会研究論文集 2001